

# 公益社団法人日本左官会議 平成30年度事業計画

## 1 事業期間

平成30年3月1日～平成31年2月28日

## 2 概観

平成29年度は公益事業項目の見直しに伴う定款変更を行い、日本左官会議の目的を確認し、組織の強化と若手職人が活躍できる場づくりに力を入れた。

左官を取り巻く環境全体を見回してみると、建築業界は活況と言われているものの、一般的にはコスト削減、工期短縮が望まれる現場が多く、左官を含む伝統的な構法はますます特殊なものとなり、後継者不足も指摘されている。一方では、次のような動向が注目される。

- ①観光庁の観光立国推進基本計画が閣議決定され、文化財や古民家など歴史的建築を観光資源としての活用をしようという動きが活発化している。
- ②ハウスメーカーの中に「日本」や「伝統」をキーワードにした高級ブランドをつくる動きが出てきている。
- ③家づくりの際に自然素材を好む消費者は一定層いるが、それに関連し、施主自らが施工に関与するDIYの人気の高まっている。
- ④父から息子へと引き継がれることが多かった職人の世界が様変わりし始めており、外国人も含め、建築や美術関係の学校の卒業生や女性が左官職人を志望するケースが出てきている。

このように変化している時代背景を踏まえつつ、「材料を自ら調合し、厚く塗る」ことが左官本来の技術と文化であり、だからこそ発展や応用が可能であるということを粘り強く、広くアピールしていくことが日本左官会議の最優先の課題である。

つまり、古い建築や文化財は単に表面の見え方を踏襲すればよいというのではなく、職人技術や素材の継承があつてこそ意義や価値があるということ、日本の左官の技術は素人も参加できるプリミティブな部分と高度で精密な部分の両方を持っていることを、一般の人たちや専門家たちに伝えていく。今年度もそこに力を入れていきたい。

## 3 事業の内容

### 1) 広報・啓蒙活動

【シンポジウム「職人がいる町、塗り壁のある暮らし—その終焉がもたらすもの」】

平成28年度に開始した、地元の複数の職人や建築家を交えたシンポジウム。平成29年度は山形と京都で開催した。今年度も地方都市で2回開催し、地域の素材メーカーや異業種とも連携していく。

#### 【学生を対象とした左官を知るワークショップ】

日本建築のなかで欠かせない技術であったにもかかわらず、実際、建築やデザインの学生であっても左官を学ぶ場面はほとんどない。左官技術の基本を知ることによって、彼らが設計やデザインの仕事に就く際にも、多様な提案ができることになる。平成29年度は、武蔵野美術大学でデザインを学ぶ学生を対象にワークショップと座学を行い、1年生120人、4年ゼミ生13人が参加した（担当：五十嵐久枝教授）。平成30年度も大学などと連携しながら、ワークショップや講義の機会をつくる。

#### 【聞き取り 俺たち左官の70年】

年代も地域もさまざまな左官に、戦後、左官が辿ってきた道をていねいにヒアリングしてまとめた記事を制作、前半は既にサイトで公開している。この後半をアップする。

#### 【「斎藤家庭園土蔵 修復の軌跡」上映会とトーク】

平成29年度は芸術文化振興基金の助成金を得て、宮城県石巻市の国の名勝「斎藤家庭園」内の土蔵修復を追ったドキュメンタリー映画を制作。映像作家のト部弥生は、土蔵に残された当時の職人の思いの痕跡や今回使うための赤土の採取から、木摺り下地、下塗り、中塗り、なまこ壁の試作、そして斎藤家の歴史に至るまで丹念に取材。平成30年3月に上映会とトークを開催する。映像作家、建築家、石巻市教育委員会担当者、左官が登壇する。その模様もサイトなどで報告する。

#### 【「日本の壁をみる」見学会】

かつての左官職人の仕事を左官職人の解説と共に見学する、毎回好評を得ている会。今年度は北九州で開催する予定。

## 2) 研修・育成

#### 【土と左官の研究会】

平成29年、左官や自然素材に興味のある建築家2名、研究者4名、左官およびビルダー5名による「土と左官の研究会」の第1回目を12月、名古屋工業大学で開催。土壁の耐震性、土や職人の違いによる土壁の性能、土壁の温熱環境、海外の土の建築に関わる教育、土壁が心身に与える影響など、話は多岐にわたった。左官職人にとっては建築家の仕事のやり方や研究者の取組みを知り、研究者や建築家はリアルな職人の声や思いを聞くという、意義のある集まりとなった。左官の技術や人を実際に知れば、興味が湧き、仕事に生かしたいという機運が生まれるという感想も聞かれた。第2回目は平成30年3月に愛知産業大学で開催し、内容をサイトなどでも発信していく。

#### 【左官の短期研修】

左官技術が身につく長期のカリキュラムを組んでいる学校では、生徒不足が問題となっているという。しかし一方では、技術を習得あるいは向上させたいという要望をもつ左官職人、庭師などそのほかの分野の職人、DIYを志す一般人、海外の職人あるいはアーティストたちは着実に存在する。生徒それぞれの要望に応じられる短期型の研修が望まれている。今年度は今後、それを実施するためのリサーチを行う。

### 3) 法案の研究と提言・提案

#### 【左官職人を取り巻く実態や材料の現状を調査】

左官職人を取り巻く問題は、後継者不足、不安定な収入、職人の技術低下、本来の技術を要する現場の不足、材料や道具のつくり手の減少など多岐にわたり、どれも深刻である。

宇野みき・宇野勇治による「町場左官職人の技能継承と労働環境に関するヒアリング」の調査には日本左官会議も協力し、具体的な課題が見えてきた。これらの解決へ向けて、職人がつくる木の家ネット、伝統を未来へつなげる会などと連携して、方策を練る。

### 4) 左官を中心とした建築物の修復、施工、そのための技術、材料の研究開発

#### 【唐獅子土蔵プロジェクト】

岩手県花泉で進行中の唐獅子土蔵の修復を引き続き行う。

### 5) 国際交流

#### 【ドイツ人研究者と左官職人によるセミナー】

元アーヘン工科大学のマンフレッド・シュパイデルは、日本の左官に造詣が深く、同校のサマースクールにも長年、日本の職人を招聘し、授業を行ってきた。彼はまた、ブルーノ・タウト研究の第一人者でもあるので、タウトが絶賛したことで知られ、多様な左官技術が見られる桂離宮について、左官・久住章と共にセミナーを開く。

#### 【アメリカの土のアーティストとの交流】

アメリカ・アリゾナで自然素材を使った建築やアートをつくり、世界各地から職人、アーティスト、建築などを受け入れてワークショップやセミナーを行っているビル&アセーナ・スティーンを日本に呼び、日本の職人と交流。具体的には、作品の素材となる原料の産地や加工工場、土を使った建築やアートの現場を見学し、共に公開で作品をつくる（会場は、愛知県常滑のINAXライブミュージアム「土・どろんこ館」を予定）。前年も文化庁の「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」に補助金を申請して同様の事業を計画したが、残念ながら採択されなかったため、再度計画する。

以上